文明開化の時代
にて大恵の雅遊も
弥増に往還さえも世よりいき並木通を
戯場本舞臺書割しよ雷神門の
旧地に向朱塗の仁王の観音の御堂を高く俯き右手
五重の塔さらに千本桜の花紅葉時を彩る色八萬
吉原三堂之居遊楽愉快ぎ粋一繁昌名妓割烹家
の大通夏の夜前栽更世話家体お戻かけ部右側猪
鹿き裏家も潔く新に補理小亭なのに賈八倍する
捌かんものと主人の周旋緑比島シヤモの仕込を吟味刻限
正に調進者大方慈心の立トでも透き風味厚味の
タレ和調是を往言の孫もの出ず扱所作事の躍り縁
魚のぬきよ左者の和ん所と先鶏卵の厚焼玉子懐石の
料理家の口腹を満し加ぐんもの於安八四二人まさに一本
○の一合つけ者かりめの周縁ちびりまとり平に御飯も
居さまお會計の尽るも廉くて味くて平生の富世東京の
隅々すると四国磯きて四評判見世開の神ぱり永遠に
いまさび繁盛ー根生の家の枝葉繁り御助ろよ。
四月の雨の濯頭まけ　まんかりて　瀬川如皐演　（花言作舎）
當月十一月明日より浅草並木町西側の藤次
當日廉家　四月下　好あんぐう
さー出ん

松浦家